

難病に苦しむ妻の命ささえて

妻の病名は「多発性硬化症」といって、治療の方法がない。各医大から医師がきて診察するが、十一年前に入院した当時より少しはよくなっているが、まだ歩けない。

妻は、今年じゅうには家に帰りたい、といっている。私も、一日も早くよくなつてほしい。灰色の病院生活はもうごめんだ。

地域や職場にはいろいろ迷惑をかけているが、妻の病気がなおり次第お返しをしたう。

×

右の一文は、三川指導部十分会(今は七分全)の新聞「あせ」の百五十号記念特集号(六月二十五日発行)に掲載されていたものだ。

筆者の坂口さん(52歳)は仕繰工で、お住まいは大牟田市野添宅十六棟です。妻のとし子さん(47歳)が、文中にあるように得体の知れぬ「多発性硬化症」という病気におかれ、長く三井天領病院の第二病棟一階に入院中です。

「手足にまったく力はいらず、思うように立つことができません、腰などに痛みもあるようで、とにかくやっかいな病気です」、「と看護婦さんがそっと教えてくれました。

「ご主人が、休みの日ごろも毎日きて面倒を見ておいて下さるが、大変でしょう」、とも話してくれましたが、こんな仲間を、私たちは暖い連帯で包み、私たちははげましていきたいものです。

がんばれば、坂口さんご夫婦。

おねがい

組合員の皆さん、人それぞれにいろんなことばつかるものですよ。それらのことを、手記にまとめて本紙へ寄せてください。ようお願いします。

—編集部

26日 原子力の日。

A black and white photograph showing a large group of people, mostly men, sitting on the floor in a room. They are arranged in several rows, facing towards the right side of the frame. The room has a high ceiling and some furniture is visible in the background.

三川指導部12分会（田中精一分会長）は、先ごろ家族ぐるみバスを借り切り阿蘇の仙酔峡へ。秋の一日を楽しんだ。

を知りたい。しあわせをつか
たい今日このごろである。

ずかしさも体験した。そして、組合活動や主婦会活動をするこ

の対応策が必要である。活
るにしても、家庭を忘れ、
しかし、何かはつきり
えを知りたい。しあわ

教える、ドラマ「おていちゃん」

主婦会三川 猿渡ハキ工

とにかく、おしめやミルクをかかえてデモや集会に参加していた思ひ出をささげ、ちとちと誓くことや話すことがにが手な私は、これからも体で行動したいこうと思いついてゐるやうです。

学習会について

三池主婦会は九月二十日、九州大学の荒牧正憲教授を招き学習会を開催しました。「主婦会運動をふり返って」という題でお話していただきましたが、三池主婦会が結成される背景から始まり、英雄の約束をしたのです。そのまま終戦前、私は帰国しました。

戦後復員してきました夫は、さっそく三川鮎に就職。勤務年数を重ねました。間もなく停年という昭和四十二年九月二十八日、三川鮎坑内火災に被災。CO中毒症におかされて入院加療。現在に至つ

なき百十三日の闘い、三池闘争、CO闘争と続く三池のたたかひをふり返り、さびにこれまでの闘いに学びながら、今横たわっている課題と取り組んでいかなければならないことまで、考えさせられることが多かったのではないでしようか。

なお、学習会には六十人の主婦の参加がありました。

今、新聞やテレビで、よく有事立法のことが報道されています。思いますとご承知のように、自衛隊は初め警察予備隊として発足したものでした。が、やがて保安隊となり、今の自衛隊となつてきたのです。今では名実共に、軍隊化してしまいました。恐ろしいことです。

予備隊当時、天災地変などに復旧作業などにたずさわることが報道されたりすると、なるほどこれで私達は税金がムダにならなかつたと思つたものでしたが、今の自衛隊の幹部連中は戦争の恐ろしさを知らないのか、それとも忘れたのか、「外部からの侵入に備えて」などと御託を並べ、有事立法などを押し出してくるのです。

「おていちゃん」のドラマを見てわかるように、戦争はマンガに描かれるようなカッコイイものでもたやすいものでもなく、何もかも引き裂いてしまふものなのです。

テレビのドラマ「おていちゃん」を見ながら、せめて明い、平和な社会をつくり、やがて大人に成長したときの子どもや孫たちから、「祖父や祖母たちは、平和のためによく頑張つてくれた」、とほめられる身になりたいと思つております。

恐ろし、有事立法の動き

教える、ドラマ「おていちゃん」

主婦会三川 猿渡ハギエ

ておりますが、ドラマのおていちゃん弟が出征するときのあの悲しみ、つらさは、私の年代の者には痛いほどわかるのです。

夫は生きて帰ってくることで喜きましたが、もう戦争はこりごりです。自分たちがかつて駆り立て